

# ルカ福音書における祈り

Prayer in the Gospel of Luke

橋本 滋男

Shigeo Hashimoto

キーワード

祈り、ルカ福音書、受難、霊の授与、編集史、終末の遅延

KEY WORDS

prayer, Gospel of Luke, suffering, descend of the Spirit, redaction-criticism, delay of parousia.

要旨

祈りは人から神への意思を伝えるためのチャンネルであり、宗教生活においてはきわめて重要なものとされている。人は祈りによって懇願、感謝、悔い改めなどの心情を表す。新約聖書においても、祈りは大きな役割をもち、イエスは弟子たちに「主の祈り」を教えたのであった。

4福音書において祈りに関する語（動詞、名詞）の用例統計を見ると、ヨハネ福音書には全く見られないことが注目される。他方、ルカ福音書においては用例が多く、この語の分析を通してルカの祈りについての神学思想を見ることができる。ルカでは、並行箇所では祈りが言及されていない場面で祈りを取り上げる例が多いのであるが、イエス自身が祈る箇所（A）と祈りについて教える箇所（B）に分類してみると、Aにおいてはイエスの祈りは来るべき受難と関連していることが指摘できる。またBの箇所では、終末遅延に対して祈りで対処すべきこと、あきらめずに祈るべきことを教えている。しかしB（とくに18.1以下）において、ルカは祈りによって人の期待が実現されるという考えを見せている。

## SUMMARY

Prayer is the most important channel between men/women and God, and through prayer they express their deep thanks, sincere repentance and genuine wish before God. Therefore prayer is indispensable in our religious life. In the New Testament Jesus often prays by himself, and teaches what we call “the Lord’s prayer” to his disciples as a model for their prayer.

Through the statistical analysis of verbs and nouns concerning prayer in the four Gospels we find that the Gospel of John alone does not use these words. This is one of the interesting facts in studying theological ideas in the evangelists. On the other hand, Luke tells us that Jesus prays often in many and important settings of his life, although Matthew and Mark do not mention Jesus’ prayer in some synoptic parallel passages. This means that Luke has a “theology of prayer” which functions to support Luke’s whole work of the Gospel. By careful exegetical study of the passages where Jesus’ prayer is mentioned, we find that in Luke Jesus’ prayer is related to his suffering, pointing toward his crucifixion. In other passages of Luke where Jesus teaches about prayer Luke suggests the problem of the delay of eschatology can be solved through the persistent prayer of the believers.

## I はじめに

---

祈りは、人格的存在としての神を立てるタイプの宗教において、人が神に向かってその意思を表明するためのチャンネルとされている<sup>1</sup>。神からの意思表示には、文書、夢、くじ、など様々な方法があって、それによって啓示が与えられるが、人からの意思表示にはおもに祈りという手段がとられている。したがって祈りは信仰生活においてきわめて重要な意義を担っている。その形態も多様であるので、いくつかに分類することも可能である。たとえば祈りが言語で表現される場合、それが何らかの権威ある機関（教会）によって定められた文言の場合もあれば、個人のその時々 of 自由な言語表現に任せられている場合もある。また逆に沈黙のうちに祈りがささげられる場合もあり、それはある場合には瞑想に近い。

祈りは個人の信仰を喚起し、あるいはそれを強化させる働きがあり、問題解決の糸口を発見する機会となることもある。さらに共同体の意志形成やその確認にも重要な意味をもつ。それは神との交流であるので、宗教活動において当然のもの、不可欠なものとなされ、そのため、かえって立ち入った批判的検討がなされていないように思われる。しかしたとえば、他者への呪いや不幸を求める祈りは不当であろうし、祈りによって自己正当化を図るのも適当な宗教行為とは考え難い。一方で果たして祈りは聴

かれるのか、という問題もあり、これは祈りにおける人の要望とそれに対する神の返答（ないし無返答）の関係をめぐって神義論的問題への広がりをもっている。そのような意味で、祈りの意義や妥当性を論じることは現代でも有用であろう。

ところで新約聖書において祈りはどのように描かれているであろうか。イエスにおいても初期キリスト教においても、その活動の根底には当然に祈りがあると想定されているが、祈りはあらためて考察するに値するテーマであると思う。

## Ⅱ 統計的検討

まず祈りを表す主要な語として、4福音書と使徒言行録での使用頻度を調べると以下の通りである。

第1表

	προσεύχομαι	προσευχή	εὐχομαι	εὐχή	δέομαι	δέησις
Mt.	15	2			1	
Mk.	10	2				
Lk.	19	3			8	3
Jn.						
Acts	16	9	2	2	7	
NT全体	86	36	6	3	22	18

この表から目に付くことは、ヨハネ福音書においてこれらの祈りに関する語が全く用いられていないことである。これは用語法における偶然の現象ではなく、むしろ記者ヨハネのキリスト論に基づく神学的意図を示していると考えられる。すなわちこの書においてイエスは神に祈りをささげるにもかかわらず(ヨハネ 11.41、12.28、17.1-26)、記者はそれらの文脈において上記の語をあえて用いていない。それはおそらくヨハネにおいて、イエスは一般人とは違って、常に神と一つであるという考え方があったためであろう(1.18、3.35など)。神と常に一つであれば、祈りという形式は不要となる。つまり祈りは他者としての神への語りかけであり、ヨハネ福音書のイエスにとって神は他者ではないのである。

注目すべき点は、他福音書と比較してルカ福音書における用例の多さである。とりわけπροσεύχομαι(とその名詞形)、δέομαι(とその名詞形)<sup>2</sup>の多さが顕著であり、これらの語は使徒言行録でも高い頻度を示している。このことは、ルカにおいて他福音書以上に祈りが重視されており、そこにルカ福音書全体の構想の柱となる思想が作用して

いることをうかがわせる<sup>3</sup>。すなわち「祈りの神学」とも言うべきものが見出されるのである。ルカは、他福音書と違って、イエスの誕生の記述に先立ってまずヨハネの誕生を物語るが、その最初の場面で「大勢の民衆が皆…祈っていた」(1.10、προσευχόμενον)と述べる。続いて、神殿にこもるザカリアに天使が現れて「あなたの願いは聞き入れられた」(1.13、ἡ δέησίς σου、新共同訳、直訳すれば「あなたの祈り」と)と告げて、ここに使徒言行録にまで至る救済の全物語が始まるのである。このルカの冒頭部分における祈りのモチーフは、単に物語り叙述の都合によるのではなく、著者の構想上の意図をかなりはっきりと反映していると考えてよい。従って以下においてはこれらの語、とくにπροσεύχομαιとその名詞形の用例を手がかりにして考察を進めていく<sup>4</sup>。

なお上表の語のうち、εὐχήとεὐχομαιは新約全体での頻度が少なく、使徒言行録における用例では18.18, 21.23で「誓願」を意味する(18.18ではパウロの誓願、21.23ではエルサレム教会員の誓願)。またその動詞εὐχομαιは、使徒言行録26.29で、パウロがアグリッパ王の前で述べる演説において人々がキリスト教徒になることを期待するという意味での「願う」であり、27.29も「切実に願う」というほどの意味であって、とくに宗教的祈りの意味は希薄である。なおこれらの語は福音書には用いられていない。

このほかに、神への祈りの文脈において、祈りに関連する動詞として以下の語をあげ得るが、δοξάζωを除き、ここでも他福音書よりもルカでの用例が多いことに注目しておきたい。

第2表

	αἰνέω	δοξάζω	εὐλογέω	εὐχαριστέω
Mt.		4	5	2
Mk.		1	5	2
Lk.	3	9	13	4
Jn.		23	1	3
Acts	3	5	2	2
NT全体	8	61	42	38

これら4語のうち、あとの2語は、供食の奇跡や最後の晩餐での食事の前後にささげる神への「感謝」を表すことが多い。さらに神に対して「父よ」と呼びかけて、明らかに祈りとして語りかける文であっても、動詞λέγω(言う)に導かれる場合がいくつかある(ルカ10.21など)。したがって祈りに関する考察範囲をどう決めるか、用語から簡単に決めるべきではないであろうが、本小論では第1表の語を手がかりにしてみたい。なお相手の前にひれ伏して(προσκυνέω)願う場合、それは礼拝

の姿勢でもあるが、対象が目の前にいる人物であれば「懇願」であって「祈り」ではないと言える<sup>5</sup>。

第3表

## 共観福音書における προσεύχομαι

(カッコつきの箇所提示は、該当箇所はあるが用語がないもの。空欄は該当記述なし)

Mt.(15回)	Mk.(10回)	Lk.(19回)	区分	要点
		1.10		ヨハネの誕生の前、民衆が外で祈る
(3.16)	(1.9)	3.21	A	洗礼を受け、イエスが祈る
(8.4)	(1.45)	5.16㊸	A	重い皮膚病を癒したあと、ひとりで
(10.1)	(3.13)	6.12㊸	A	十二使徒選出の前、徹夜で祈る
5.44		6.28		侮辱する者のために祈りなさい
(16.13)	(8.27)	9.18㊸	A	ペトロの信仰告白の前にひとりで
(17.1)	(9.2)	9.28	A	変容の山で
(17.2)	(9.2)	9.29	A	祈っているうちに変容する
(6.9)		11.1㊸	B	イエスがある所でひとり祈る
		11.1	B	ヨハネが教えたように、祈りを
6.9		11.2	B	祈るときには、こう言いなさい
		18.1	B	気を落とさずに絶えず祈れ
		18.10	B	二人の人が祈るために神殿に
		18.11	B	ファリサイ派はこのように祈った
	12.40	20.47		律法学者は見せかけの長い祈り
26.36	14.32	22.40		誘惑に陥らないように祈りなさい
26.39㊸	14.35㊸	22.41㊸	A	イエスは、ひざまずいてこう祈った
		22.44	A	(苦しみもだえ、切に祈った)
26.41	14.38	22.46	A	起きて、祈っていなさい
26.42㊸	14.39㊸			二度目に行って、祈った
26.44㊸				三度目も同じ言葉で祈った
6.5				祈るとき、偽善者のようではなく
6.5				偽善者たちは、祈りたがる
6.6				あなたが祈るときは
6.6㊸				隠れておられる父に祈りなさい
6.7				あなたがたが祈るときは
14.23㊸	6.46㊸			祈るために、ひとり山に
19.13	(10.13)	(18.15)		子供たちに手を置いて祈って
24.20	13.18	(21.23)		安息日にならないように、祈れ
	1.35㊸	(4.42)		朝早く人里離れた所で祈った
(21.22、名詞)	11.24			祈り求めるものは既に得られた
	11.25			立って祈るとき、赦しなさい
		(23.46)	A	(十字架上で大声で言った)

第4表 共観福音書における προσευχή

Mt.(2回)	Mk.(2回)	Lk.(3回)	区分	要点
(10.1)	(3.13)	6.12Ⓣ	A	12使徒選出の前に山で祈る
	9.29			この種の悪霊は祈りによって追い出す
21.13	11.17	19.46		神殿は祈りの家(イザヤ56.7の引用)
(26.40)	(14.37)	22.45	A	オリーブ山での孤独な祈り
21.22	(14.24、動詞)			信じて祈れば何でも得られる

第5表 共観福音書における δέομαι

Mt.(1回)	Mk.(なし)	Lk.(8回)	区分	要点
9.38		10.2		72人の派遣で、収穫の主に願いなさい
(8.2)	(1.40)	5.12		病人が治癒を願い出る
(8.29)	(5.6)	8.28		悪霊につかれた男がイエスに願う
		8.38		癒されたあと、同行を願う
(17.15)	(9.17)	9.38		悪霊につかれた子の父親がイエスに願う
(17.16)	(9.18)	9.40		弟子たちに頼んだが
		21.36	B	いつも目を覚まして祈れ
		22.32	A	イエスがペトロのために祈った

第6表 共観福音書における δέησις

Mt.(なし)	Mk.(なし)	Lk.(3回)	要点
		1.13	天使の言葉、ザカリアの願いは聞かれた
		2.37	女預言者アンナの祈り
(9.14)	(2.18)	5.33	ヨハネ宗団で断食と祈り、ファリサイ派でも

上記の第3表～第6表で、Ⓣ はイエスが民衆から離れてひとりで祈る場面を述べる箇所である。これを見ると、ルカはイエスがしばしばひとり山に退き、祈ったことを記している。この描写はすでにマルコ福音書で採用されているモチーフであり、ルカがはじめて採用したのではないが、彼はこの姿のイエスを強調している。マルコでの箇所(1.35、6.46)は、それぞれペリコーペでの書き出し部分に位置しているので、記者マルコの編集的叙述であると言える。すなわちマルコの叙述をそのまま史的情報とすることはできない。これを受け継いだルカ福音書においても、記者はそのようなイエスの姿にさらに強い神学的意味をもたせようとしている。たとえば、イエスのささげる祈りで最も重要な場面というべき「オリーブ畑」のペリコーペでは、「いつものように…いつもの場所に来ると」(22.39-40)と述べ、そこでの一人の祈りがすでにイエスの習慣となっていたことを語る。ルカ福音書においてはイエスは19章後半ではじめてエルサレムに入り、そのあと神殿内外での論争と終末について語

り(20-21章)、21.37ではじめて「オリーブ畑と呼ばれる山」で夜を過ごすのであるが、これが22.39の伏線となっていることを見ると、イエスの祈りが習慣的であったと述べるルカの筆致には、「祈るイエス」を強調するルカの意図がうかがえるのである。

### Ⅲ ルカ福音書における祈り

第3表、第4表での用例は、おおまかにA、Bの2つに分類して見ることができる(区分の欄を参照)<sup>6</sup>。Aはイエスの公活動での重要な場面においてイエス自身の祈りが言及されている箇所、ルカ福音書の特有の記事に多い。Bは祈りについてイエスが弟子たちに教える箇所である。

#### A

① ルカ3.21 イエスがヨハネから洗礼を受けた事実は、初期教会にとって何らかの弁明を要することであった。マタイ福音書ではヨハネがイエスへの洗礼を最初は辞退したと述べる。ヨハネ福音書ではイエスの受洗についてもはや言及しないという手法をとる。これに対してルカでは、ヨハネの授ける洗礼には聖霊を受ける効果がないことを述べる(使徒19.1以下)。さらに注目すべきことに、ルカは洗礼においてイエスが祈るという独自の記述を加えている。この箇所では、イエスの祈りはヨハネによる洗礼のあと始まり、天からの声を聞くまで続くことに注目すべきである<sup>7</sup>。祈りをささげる最中に、イエスは霊を受けるのであって、マルコと比較すると、霊の降下は洗礼の行為よりも祈りと結びついている。すなわちルカの叙述において洗礼はすでに過去となった行為(アオリスト受動態、βαπτισθέντος)であり、他方、祈りは継続を表す現在分詞 προσευχόμενοςで描かれるのである<sup>8</sup>。

ここでイエスが受けた霊について、関連する箇所として、23.46の十字架上でイエスの最期の言葉「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」が思い起こされる。すなわち洗礼における祈りは、霊の受領と返還を媒介にして、イエスの十字架を示唆するのであり、これがルカ福音書の全体的構想を導く糸となっている。イエスにおける祈りと霊の授与、苦難の結びつきは、さらにステファノの死の場面を想起させる(使徒7.59、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」)。ステファノは、聖霊を受けて発足した初期教会の最初の殉教者であり、彼においても、イエスと同様、祈りと霊、苦難の結びつきが見られる。さらにステファノの最期の場面で、「天が開け」く(使徒7.56)のは、ルカの構想において当然イエスの洗礼において「天が開け」(ルカ3.21)る場面と対応している、と考えてよい<sup>9</sup>。

② ルカ 5.16 重い皮膚病患者が癒された奇跡物語の結びの記事である。この奇跡によってイエスの評判が広まったため、大勢の人々が癒しを求めて押し寄せるが、イエスは「人里離れた所に退いて祈っていた」とある。ルカの資料となったマルコ 1.45 では、奇跡のあと、イエスは「町の外の人のない所におられた」と記すのみで、ここに祈りを述べるのはルカ固有の文である。ここでも現在分詞の *προσευχόμενος* が継続を示すが、とくにここでは祈りがイエスの習慣であったことを示唆する。

イエスが「人里離れた所」へ退くのはすでに 4.42 にもあるが、そこではとくに祈りに言及せず、5.16 で祈るイエスを語るのは、ここでのブロック構成と関係があろう。ルカはこの文脈におけるペリコーペの配列をマルコからほぼそのまま取り入れており、中風の癒し、レビの召命、断食について、安息日論争、手の不自由な人の癒し、と続く。この結び（ルカ 6.11）で、1つの結論に至る。すなわち、これらの癒しと論争のあと、イエス殺害の計画が持ち出されるのであるが（マルコにおいても）、こうした結論に至るこのブロックの導入に当たって、その冒頭にルカは祈るイエスを描くのである。従ってここでもイエスの祈りと苦難（6.11）が結びついていると見ることができよう。

③ ルカ 6.12 ルカは 12 使徒選出の記事をマルコから得ているが、この重要な場面の記述に当たって、ルカはマルコを相当に変更している。第一に、使徒の選出に先立って、イエスはひとり山に入り、夜が明けるまで祈った、と述べる。これは使徒選出がイエスの個人的な計画によるのではなく<sup>10</sup>、むしろ神と相談した上で自らの死後にも任務を継承していくべき人物群を選定することを意味する。それは、ルカによれば、祈りにおける選定であった。しかもそれは徹夜の祈りであった。

第二に、このような祈りを経ての選出にもかかわらず、12 人の中に、イエスを苦難に陥れることになる「イスカリオテのユダ」が含まれている。それはその時点でのイエスの人物評価に大きな過ちがあったことを意味するのではなく、逆にイエスの祈りに基づく決定の中にさえ苦難の影が宿っていることを語るなのである。この点を読者が正しく読み取るため、ルカはこの物語の直前に（6.11）「彼らは怒り狂って」イエス殺害の決意を固め、その計画を立てるに至ったことを述べる。すなわちルカでは殺害計画と祈りが直結している。他方、マルコでは殺害計画（3.6）と使徒選出（3.13 以下）の間にイエスの治癒活動についてのいわゆる「まとめの記事」（3.7-12）を置き、二つの事柄の直接的な関連づけを記していないが、ルカは間に挟まった治癒記事を省いてしまっているのである。

④ ルカ 9.18 ペトロの告白が記されるペリコーペの冒頭に、ルカはイエスがひとりで祈っていたことを述べる。この祈りの文脈において、イエスと弟子たちはイエスについての世評を論じ合い、その後、弟子たちを代表する形でペトロが「神からのメシア」



であると心情を述べる。その後の物語の展開は、マルコと比較してかなり簡略化されており、もはや弟子たちはイエスの歩む道について誤解に基づく忠告を差し挟むことなく、また叱責を受けることもない。注目すべきことは、この文脈においてイエスの運命は（9.22）弟子たちの運命（9.23）に直結していることである。ここでも祈りに始まるパラグラフはイエスの苦難と弟子たちの苦難の予告に至るのである。ルカがペトロの忠告やそれによる叱責を省いたのは、おそらく冒頭の祈りのモチーフと苦難のモチーフとの関連をしっかりと印象付けるためであろう。ルカは叙述の途中に他のモチーフが介入することを避けたのである。

なお8節で、祈るイエスの傍らに「弟子たちは共にいた」とあるが、それはこの文脈での苦難がイエス一人に関するだけでなく、弟子たちの運命に関わるためと思われる。

⑤ ルカ 9.28, 29 このペリコーペの書き出しにおいて「祈り」が2度も記されている。すなわち、他福音書と違って、ルカにおける変容物語はイエスが祈るために山に登るところから始まる。さらに29節でイエスの変容はまさに「祈っておられるうちに」 ἐν τῷ προσεύχασθαι αὐτὸν 生じたことを述べる。ここでモーセとエリヤが出現するのは、彼らが律法と預言という旧約の2つの柱を代表する人物であるので、イエスの活動において旧約の教えが集約して体现されていることを表すと解されるが、ルカにおいて彼らは「エルサレムで遂げようとしておられる最期（τὴν ἔξοδον αὐτοῦ）」を話題としていた、と言う。彼らが論じ合ったこのエクソドス ἔξοδος は、文字通りには「出口」であるので、イエスの死と天上界への脱出を指す。したがってこの場面での祈りも、十字架の苦難との関連を持つことが指摘できる。

Conzelmann は、ルカにおいて変容はイエスが苦難を受け入れるための発端となっており、他方、洗礼はメシアとしての任務を自覚して受け入れる発端である、と論じる<sup>11</sup>。しかしこれら2つの箇所を祈りと結びつけたルカの意図を意味を考えると、ともに苦難への指標となっていることを見落としてはならない。

⑥ ルカ 22.32 イエスと一緒に最後の夕食をとった弟子たちは、その席で、だれが一番偉いかという議論を始める（22.24-30）。この論争が終わったあと、イエスはペトロに向かって彼がイエスを否認することを予告し、さらに言葉をついで「わたしはあなたのために祈った」（ἐδέηθην）と告げる。イエスの逮捕、裁判、処刑と続く緊迫した描写に先立って、弟子たちの信仰のためにイエスが前もって祈るのである。こうしてイエスの祈りは受難に直面させられた弟子を守るのであり、これによって立ち直ったペトロには他の弟子たちを励ます力が与えられる。この文の流れにおいて、イエスはペトロ一人のために祈るだけでなく、サタンに襲われるすべての弟子たちを視野に入

れている（31節で「あなたがた」が複数であることに注意）。

⑦ ルカ 22.39-46 マルコ福音書では「ゲツセマネの祈り」に当たる物語であるが、ルカは「ゲツセマネ」という地名を用いず、「オリーブ畑」と言う。またルカはここでもマルコをかなり短縮している。マルコでは祈りの場と弟子たちの間をイエスが3回往復するが、ルカではこれが1回のみとなり、差し迫った苦難を前にして恐れおののくイエスの姿（マルコ 14.33）や弟子の弱さのモチーフは著しく弱められている。その一方で、ルカはこのペリコーペの始めと終わりを「祈り」で囲み（40、46節）、そのいずれも祈りが「誘惑に陥らない」ために残された唯一の手段であることを述べる。なおこの短いルカのペリコーペで、「祈る」が4回見られるが、うち1回（44節）には本文批評上の疑義があり、Nestle-Aland 27版では2重カッコを付せられている。3世紀に由来する P-75 のほか主要大文字写本に記載がなく、43-44節はルカの文として扱うべきではないであろう<sup>12</sup>。

さて祈りによって退けるべき誘惑とは、悪魔によってもたらされる（4.2）。かつてイエスは40日の断食の果てに悪魔とたたかって、その誘惑を退け得たが（4.13）、そのとき悪魔は時が来るまで「イエスを離れた」という。受難の時が近づいた今、22.3で再び悪魔は登場し、まずユダに入ってイエスを裏切るように仕向け、さらにペトロたちを狙う。22.31-32でこれを救うためイエスは祈るが、その対決が極点に達するのがオリーブ畑での苦闘の祈りである。祈りによってイエスは誘惑を退け、敢然と十字架の苦難に向かう。そしてここでイエスは祈りによって勝ったのであるから、十字架上でのイエスはその最期においてもマルコにおけるような悲痛な苦悩の叫び（マルコ 15.34）をあげることはあり得ないこととなる。

なお、この祈りの場に居合わせるのは弟子たち全員であって、特定の3人だけではない。そのことは弟子たちすべてがイエスの祈りにおいて覚えられていることを示唆する（22.31-32）。

以上、Aグループに該当する7箇所を見ると、ルカにおいてイエスの祈りはすべて何らかの形で最期の受難と関連していることが明らかとなる。イエスは祈りのうちに苦難に向かう決意を固め、祈りによって苦しみを越えて救いをもたらす道へ歩み出す。これはルカの全体的な福音書構成の糸として作用している。そしてこうした祈りの意義は、ルカの第2巻である使徒言行録に受け継がれていく。

一般に、ルカ福音書においてはイエスの苦難の意義付けが他福音書より不明確であると指摘される。それはルカがマルコに記されているような十字架上のイエスの悲痛な叫びを省き、むしろ穏やかな死を描いたこと、イエスの死に贖罪的意義を見るマルコ

10.45「多くの人の身代金として自分の命を献げるため」の句を採用しなかったことを理由にしている。しかし祈りの文脈をたどってみると、マルコとは違う視点からではあるが、ルカにおいてもイエスの苦難は大きな意義を担っていることが理解されるのである。

他方、祈りについてイエスが教えるBの箇所では、Aグループほどに明確な思想は指摘しがたい。主要箇所として、まず祈りの基本というべき「主の祈り」があり、第2に、あきらめずに絶えず祈るべきことを教える箇所がある。

## B

① ルカ 11.1-2 「主の祈り」の由来について、ユダヤ教の祈り「カディッシュ」の影響や類似点がしばしば論じられているが、「主の祈り」の簡潔さと神への直接的な訴えのスタイルから見て、イエスが教えたものと広く考えられている。ルカ版では、神に対して修飾的付加語なしの「父よ」というごく簡潔な呼びかけのあと、神についての願い2項目と私たちについての願い3項目で構成されており、この構造はマタイ版よりも古いと考えられる<sup>13</sup>。しかしルカは「主の祈り」にいくつかの変更も加えている。本小論での必要な範囲で指摘しておくべき点として、第1に、この祈りが与えられた状況についての説明が挙げられる。マタイでは異邦人のようにくどくど祈ってはならないという文脈で、短い祈りの例として「主の祈り」が提示されているが、ルカではまずイエスがひとりで祈っていたという場面設定で始まる。1節の書き出しの文（10語のうち「ある所で」ἐν τόπῳ τινὶを除いて）は、9.18と合致する。その上で、弟子たちの求めに応じてイエスが教えたという描写である。この1節は、文体から見て、明らかにルカの編集句であり<sup>14</sup>、ルカは祈りがイエスの日常的慣習であったことを示す。

ここでヨハネ宗団でなされていた宗教的実践が引き合いに出され、これに対抗してイエスの弟子グループでもそれに匹敵し得る権威ある祈りの文言が提示される。ルカにおいてしばしばヨハネ宗団の存在と活動は初期教会に対する競争相手として意識されており（たとえばイエスの誕生物語はヨハネのそれと同じパターンで叙述されている<sup>15</sup>、ヨハネ宗団の洗礼は実は救済的効果がない、など<sup>16</sup>）、これらの点を勘案すると、「主の祈り」の由来を述べる 11.1-2 はルカによる文と考えてよい。

第2は、この祈りを教える段落の結びに（13節）聖霊が言及されていることである。つまりルカは祈りにおいて求めるべきものとして、あるいは祈りによって与えられるものとして、「聖霊」を示すという考え方である。そして聖霊に導かれた信仰的活動は、使徒言行録で展開していく。

② ルカ 18.1-8 は、あるやもめが「人を人とも思わない」（2節）傲慢で「不正な」（6節）裁判官に対してしつこく懇請を繰り返し、ついに彼の心を変えてしまうとい

う話である。ルカによれば、信仰者はこのやもめのようにあきらめずに常に祈り続けるべきであり、神は必ず祈りを聞き届けてくださるのである。ルカが祈りの意義や効用をこのように強調するのは、「神の国はいつ来るのか」(17.20)という不安が信仰者の心をおびやかす状況(終末の遅れが意識される状況)にあって、祈りによってそのような不安を克服すべきことを教える必要があったためである。そこで彼は特殊資料から入手したたとえに編集的な導入の1節を付加し、読者がこの方向でたとえを理解するよう強く導いている。さらに結びに位置する8節a「神は速やかに裁く」で、たとえの裁判官は神に他ならないことを明示している。弱い立場のやもめであっても、必死の懇請を重ねることによってあの裁判官の心さえ動かし得るのであれば、まして神は信仰者の祈りに耳を傾けるはずだという論理である<sup>17</sup>。

しかしルカの与えたこのたとえの解釈がたとえ本来の教えから導き出されたのか、にわかには決定できない。たとえ(2節から5節まで)には祈りは言及されていないのである。ここに登場する裁判官は「神を畏れず」「人を人とも思わない」人物だと描かれており、たとえの原意においてこれが神になぞらえられるにふさわしいとは考え難い。また彼女の願いは正当な理由があつたことなのか、不明のままである。通常注解では、当時のやもめが社会的な弱者であつたことを理由にして、彼女の願いが妥当なものであつたか、不問にすることが多い<sup>18</sup>。しかしルカの文では、裁判官が態度を変えるのは、彼女の願いの正当さとかやもめという境遇への好意ある配慮によるのではなく、もっぱら彼女のしつこさのゆえであつて、裁判官の心変わりはいわば厄介払いにすぎず、こうして裁判官はもう一つの不正を重ねることになる。従つて16.1以下の「不正な管理人」のたとえと同様、もともとあまりはっきりした主旨のたとえではなかつたのであろう<sup>19</sup>。シラ35.16-22<sup>20</sup>の教えをベースにした寓話であつた可能性も考えられる。いずれにせよルカはこの独自のたとえを「気を落とさずに絶えず」(1節)祈るべきことを教える話として用いたのである。6節の「主」はイエスを意味するので(16.8の「主」を参照のこと)、本来のたとえの範囲は5節までであろう。その場合、6-7節と8節はのちの付加と推定される。

8節で終末は「速やかに」ἐν τάχει出現するという希望を持続するよう促している。しかしそれが「速やかな」到来となるかどうかは、信仰者の祈り次第である。従つて8節bの修辭的な疑問文での「信仰」は、祈りと同義である。最後に8節bに「人の子」への言及があるが、これはルカの執筆時点で終末の遅れが意識されており、それに伴う緊張感の弛緩など問題が生じたため、ルカは信仰者を励ますために終末が近いと述べて、それに備えるように呼びかけたものと考えてよい。

③ ルカ18.9-10 これもルカ特有のたとえである。ファリサイ派と徴税人が登場し、神殿でそれぞれの信仰を祈りで表明する。ここで二人の祈りが話の材料として用いられ

ているが、しかしその主テーマは祈り自体というよりも「義とされる」(14節) ことであり、神の前に徹底的に謙虚であるべきことを教えている。すなわちファリサイ派が神への語りかけにおいてすら自慢をたっぶり述べるのに対し、一方の徴税人は祈る言葉さえ持たない。しかし神に義とされるのは後者である。このたとえが登場人物の言葉を通して読者に問いかけることは、信仰の内実と神の前での謙虚さの問題である。祈りは彼らの信仰が鮮明に表出される場ではあるが、むしろ問題は祈りの背後にあるそれぞれの信仰であり、その点で先行のたとえの結び(8節、「人の子は…信仰を見出すだろうか」)に対応している。

④ ルカ 21.36 ここでも終末の到来が遅れていることが意識されている。いつ来るか分からない終末に備えて、目を覚ましていなければならないが、そのための具体的な対策として、この箇所では「常に」(ἐν παντὶ καιρῷ) 祈るべきことが勧められている。ここでも 18.8 と同様に終末に現れる「人の子」は裁判官のイメージである。ἐν παντὶ καιρῷ がルカ特有の文言であるので、この節はルカがマルコ 13.26 を素材にして、祈りのモチーフを加えたものと思われる。

⑤ ルカ 11.5-8 もルカ特有の記事である。ここには祈りを明示する προσεύχομαι などの語はないが、主の祈りに続く 5 節以下の文意としては祈りを意味していると解される。友人のためとはいえ、真夜中に隣家の者をすべて叩き起こしてしまうような迷惑でしつこい行為が許されるという主張は、18.1-8 のやもめのたとえと同じ主旨である<sup>21</sup>。祈りはすぐには答えられないこともあろうが、あきらめてはならない。さらにそれがふさわしい状況かどうか、相手側の状況を顧慮するまでもない。むしろ状況を無視したひたむきさが求められる。これがルカの主張する祈りの主眼点である。

#### IV いくつかのまとめ

以上の考察から、A グループにおいてイエスのささげる祈りは十字架の苦難との関連があることが指摘できた。これはルカにおける祈りの神学の主要な特徴である。

他方、B (祈りについてイエスが弟子たちに教える) の箇所では、2つの点を指摘し得る。第1は、終末の遅延が意識されていることである。「日々十字架を負って」生きることを求められても、現実には最終的な救いが実現せず、むしろそれが遠のいてしまったと思われる状況にあっては、どうしても信仰的緊張が弛緩しがちである。そこで第2点として、この状況でもなおたゆまずに人の子の到来を待ち続ける

よう、祈り続けるという促しである。あのやもめ（女性）のように、あるいは夜中に隣人を叩き起こす人（男性）のように、あきらめない忍耐強い祈りが事態の好転をもたらすであろうと期待されている。それは切実な懇願の祈りである。そして彼らが口にし得る祈りとして「主の祈り」のもつ意義はきわめて大きかったと思われる。教会は教えられたように「御国が来ますように」と祈ったのであった。

ところで祈りにはさまざまな働きがあるが、その基本的な要点を考えると、おそらく懺悔、感謝、懇願の3つをあげることができよう。第1の懺悔は、自己を絶対的な神の前において見つめるときの謙虚な反省であり、真摯な悔い改めである。それはすでに赦されているという喜びを根底にしていることもある。第2の感謝は、神の与える恵みを素直に受け取り、それが自分の目から見て不十分であっても、なお与えられたものを大きな喜びとすることである。この喜びは神への賛美に結びつく。イエスは、神は人が願う前に必要なものについて配慮しており、それらがすでに与えられているという確信に生きたのであった（ルカ12.30、マタイ6.32）。そこに明日のことについての思い煩いから解放された生き方が可能となる。これに対して、第3の懇願については注意が必要である。ルカがBグループで強調するタイプの祈り（とくに18.1以下、11.5以下）は、自分の願いをひたすら神に押し付けてその実現を求めるのであって、これはイエスが教えたような、すべてを神にゆだねる生き方、与えられたもの（あるいは運命）を喜びのうちに受け取る生とは、どこかずれていくおそれはないであろうか。ルカ18.1以下のたとえに見られるやもめの懇請を祈りと捉える場合、そこに祈願者の切実さが如何にあるとしても、それは第一に自分の要望の実現を求める祈りとなり、いわゆる「ご利益」を求める宗教性に近いことを指摘しておかねばならないであろう<sup>22</sup>。ひたむきさは祈りを正当化しないのである。この点でルカの祈りの神学は強く批判されるべきであると思われる。

ところでイエス自身は祈りについてどのように考えたのか、福音書を資料にする限りではあまり詳しいことは実は不明である。共観福音書には計11箇所（並行箇所を除く）イエスが一人で祈ったことを記しているが、それはいずれも記者による編集史的箇所であって、今日の資料分析の基準から見れば、史的に確かな情報とは言い難い。さらにイエスの祈りの内容や文言は「主の祈り」以外には記されていない。11.1の「主の祈り」が与えられた状況描写が史的であるとすれば（その可能性は少ない）、イエスは弟子たちの要求がなければ、祈りについて自発的に教えることはなかったということも考えられる。さらに「オリーブ畑での祈り」を別として、イエスと弟子たちが共に一つの輪になって祈る場面は福音書に記されていない。神に向かって「父」と呼びかけて祈る場合、イエスが弟子たちを含めて一緒に「わたしたちの父」という記事がないことも、問題として指摘しておきたい<sup>23</sup>。

## 注

- 1 神を信じない者であっても、自らの弱さを実存論的な危機として受けとめる時に発する言葉を「祈り」と呼ぶことがあり得る。しかしこうした広義の「祈り」はここでは考察外とする。大江健三郎、「信仰を持たない者の祈り」『人生の習慣』、1992。
- 2 δέομαι は、もともと広く「願う」を意味する語であるので、たとえばルカ 5.12、10.2（マタイ 9.38）では「祈る」というより「願う」と訳される。
- 3 ルカにおける「祈りの神学」はこれまでも注目されてきた。これははじめて体系的に考察したのは、おそらく Ott, W., *Gebet und Heil; Die Bedeutung Gebetsparänese in der lukanischen Theologie*, 1965.である。彼はイエスの祈りが信仰者の生の模範であることを指摘している。これは、終末が遅れているという意識のもとに、様々な誘惑と戦わなければならなかった初期教会の状況が影響しているという理解であり、この図式の背後には Conzelmann, H., *Die Mitte der Zeit*, 1962.の影響がうかがわれる。そのほかの研究としては、Fitzmyer, J.A., *The Gospel according to Luke, I-IX, The Anchor Bible*, pp.244ff.; O'Brien, P.T., "Prayer in Luke-Acts," *Tyndale Bulletin*, 24 1973, pp.111-127; Trites, A., "The Prayer Motif in Luke-Acts," *Perspectives on Luke-Acts*, ed. C.H.Talbert, 1978, pp.168-186; Crum, D.M., *Jesus the Intercessor, Prayer and Christology in Luke-Acts*, 1992.などがあげられる。
- 4 これに対し、マルコ福音書では祈りについての関心が薄い。「主の祈り」は採録されていず、祈りを表す語の用例も少ない。マルコでのこの面での関心は祈りよりも「信仰」にあると言える。Cf., O'Brien, P.T., "Prayer in Luke-Acts," *Tyndale Bulletin*, 24, 1973, p.116.
- 5 Q から採用されたルカ 11.9 「求めよ、探せ、門をたたけ」(αἰτεῖτε, ζητεῖτε, κρούετε) のロギオンも、ルカは祈りと解してこの文脈においている。
- 6 この区分方法は、Han, K.S., "Theology of Prayer in the Gospel of Luke," *Journal of the Evangelical Theological Society*, 43, 2000, pp.675ff. で採用されている。Han は B の箇所の共通点として「神の国」をあげているが、しかし B のすべてにおいて神の国の理念は必ずしも明確ではない。なお祈りと神の国の到来を結び付ける Han の視点は、Smalley, S.S., "Spirit, Kingdom and Prayer in Luke-Acts," *Novum Testamentum*, 15, 1973, pp.59-71. から得ている。
- 7 祈りについての動詞がここで現在時制の形であることは、この理解を支え得る。
- 8 ルカにおける祈りと霊の降下の結びつきは、Crum が強調するところである。彼によれば、3.21 はもはやイエスの受洗ではなく、イエスの祈りに対して神がどう応えたかを語るののである。Crum, op.cit., p.110.
- 9 ルカ福音書における祈りと霊の結びつきは、使徒 1.14 での祈りと使徒 2 章の五旬祭の出来事との結びつきに引き継がれている。
- 10 マルコでは使徒の選出はイエスの好みによる (ἤθελεν αὐτός 「彼 (イエス) が望む者を」)。
- 11 Conzelmann, H., *Die Mitte der Zeit*, 3., überarbeitete Auflage, 1960, S.50.
- 12 Crum, op.cit., pp.117f. は、43-44 節の本文批評問題について詳細に検討し、おもにその内的証拠に基づいてこの 2 節の真正性を支持する。内的証拠とは、たとえば弟子たちが「悲しみの果てに」(45 節) 眠り込むのは

43-44節の文を受けた記述とするほうが理解しやすい、という評価である。

- 13 マタイでは「父」への呼びかけに「わたしたちの天にいる」ἡμῶν ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς が付加されている。さらに神についての願いが3項目、私たちについての願いが3項目となって、均整の取れた形式になっている。そしてマタイ版では、それらの末尾に付加がなされていることが指摘できる。これらマタイ版の全体的特色を考えると、ルカ版が伝承史的に古いと判断される。
- 14 まず ἐγένετο が注目される。これはマタイに13回、マルコに16回であるのに対し、ルカでは71回であり、この語一つにもルカの文体的特徴が見出される。11.1の書き出し ἐγένετο ἐν τῷ εἶναι αὐτὸν は明らかにルカの文体である。Cf., Hawkins, J.C., *Horae Synopticae*, p.30.
- 15 Cf., Fitzmyer, J.A., *The Gospel according to Luke I-IX*, pp.313f.
- 16 使徒 19.1-7 参照。
- 17 書き出しの Ἐλεγεν δὲ παραβολὴν αὐτοῖς は、5.36、6.39、15.3、21.29 にもあり、ルカの文体的なくせを示す。Cf., Nolland, J., *Luke 9.21-18.34*, *Word Biblical Commentary*, Vol. 35B, p. 866.
- 18 Ott, W., op.cit., S.21.
- 19 16.1 以下のたとえば、不正な者が信仰者の模範であり、18.1 以下では不正な者が神を表している。Cf., Fitzmyer, J.A., *The Gospel according to Luke X-XXIV*, pp.1177-1178.
- 20 シラ書35.16-18、「貧しいからといって主はえこひいきをされないが、/ 虐げられている者の祈りを聞き入れられる。/ 主はみなしごの願いを無視されず、/ やもめの訴える苦情を顧みられる。/ やもめの涙は頬を伝って流れているではないか。」なお当時の文学活動において、アフォリズムや箴言とたとえの間には明確な文学ジャンルの差は意識されず、アフォリズムは容易にたとえ話に転化し得た。
- 21 Ott, W., op.cit., S.23-24 は、18.2-5 と 11.5b -8 の間に、論理的共通性に加え文体的な類似性があることを指摘している。
- 22 岸本英夫は、信仰体制には、請願態、希求態、諦住態、の3類型があるという。このうち、請願態は超自然的な力とか奇跡によって自己の願望の実現を期待する信仰態度であり、いわゆる「ご利益」追求型の宗教性である。『宗教学』、1961、96 ページ。ルカの祈りの神学にはこれに近いものがあると思われる。
- 23 共観福音書でイエスが神を「父」と呼ぶ用法において、これに「わたしたちの」が付加されるのは、マタイ 6.9 のみである。その並行箇所であるルカ 11.2 には「わたしたちの」はなく、神への直截的な呼びかけのみである。しかもマタイの場合も、その「わたしたち」にイエスが含まれているとは思えない。  
なお「父」に人称代名詞（属格）がつく用例の数を表示すると、右の通りである。

		Mt	Mk	Lk
1	父よ（祈りでの呼びかけ）	1	1	5
2	父	4	1	1
3	わたしの父	15		4
4	わたしたちの父	1		
5	あなたの父	4		
6	あなたがたの父	13	1	3
7	彼の父	1	1	
8	彼らの父	1		